

第17回中国旅行報告

「華僑の故郷広東省世界遺産開平樓閣群・梅州・潮州を訪ねる旅」(2013/2/23～3/1)

一 旅行計画の決定まで

2012年度の校友会の旅行先の選定にはいろいろと悩んだ。なぜなら、日本の方がご存じの訪中先はほとんど行き尽くした感があるからである。①高齢の参加者が多い、②初春の時期に行く、などの条件を加味すると、東北三省や内蒙古などは春先には無理であるし、チベットや西域に至っては旅行期間や体力の問題も考えねばならない。

すると残っている主な場所は河南省、広東省、湖北省などになった。そこでこれら三省を中心に5～6泊で観光地・歴史的意義・交通などを考慮に入れた叩き台を報告者が考えて、2012年9月初旬に旅行委員の皆さんに提案した。そこへ尖閣諸島問題が日中間に大きく浮上し、第7回以来永らく続けて来た、相見積り後にコースの詳細を決定するという方法では、準備が時期的に間に合わないという懸念が生じた。

そこで、後で相見積りになって選に漏れるかもしれないという条件で、日中平和観光さんに旅行先の選定に対してプロの意見を伺うことにした。湖北省案は太極拳発祥の地である武当山の観光が、高齢者にはかなりキツイという意見をいただいた。

その間、旅行委員からは“青蔵鉄道でチベット”や“長江下り”などの案も出されたが、前者は高齢参加者がいることと、春の時期は入境が禁止されることから、後者はすでに第6回で実施した経験があり、多くの旅行社に同様の企画があること、および春は長江の水量が少なくなるので第6回の時と同様のハプニングが起きかねない、ということで議論の対象から外した。なお、第6回の旅行の詳細に関しては日中学院報に掲載された長谷川先生の報告記事(校友会HPを参照)をご覧ください。

二 旅行日程の作成と説明会

旅行社の勧めもあり、第二順位だった広東省があまり寒くない上、大気汚染も少なく、日中関係のごたごたの隙間を縫うこともできそうだったので、第一候補に浮上した。当初の広東省案に入っていた桂林は、やはり渇水期なので漓江下りをあきらめて、世界遺産は開平碉楼だけになってしまった。世界遺産が平遥古城・五台山・懸空寺と三ヶ所もあった昨年度の山西省と比べると寂しい限りであるが、却って焦点を絞ることができると思い、広東省の特徴でもある華僑の故郷を廻ることに重点を置いた。もちろん、広東料理や広州市の歴史・文物も旅行の大きな対象であった。

さらに長谷川先生が旅行を率いていた際の足元にも及ばないが、第1回から何回か持たれた現地での交流会のようなことを、梅州の大学で行えないかと、欲張りな考えを持ち現地と交渉することにした。

コースは成田午後発で広州一泊、二日目は開平を見学し飛行機で潮州へ行き、美食を味わって一泊することにした。三日目は午前中の潮州見学後バスで客家の故郷梅州へ行き、二泊して客家文化を知り、当地の大学「嘉応学院」の日本語科の学生さんや先生方との交流を企画した。五日目はバスで高速を400km強(5時間)走って広州へ帰り、二泊することにした。広州市内の主なところを見学し、七日目の朝の飛行機で成田に帰着という計画であった。

成田を午後遅めに出発し、午後早めに帰着としたので、ほとんどの参加者は自宅から出発・帰宅できたと思う。旅行の時期は、3月早々に北京で「两会」が開かれ人の移動が激しくなる上、中国の大学の授業が始まるので、春節の休み明けの2月下旬に行くことにした。広州便の座席状況から2月23日出発、3月1日帰国となった。

なお、旅行社としても梅州の情報はほとんどないとのことなので、土地勘がほしかったのと、大学側と事前接触して、日本語科との交流が出来るかどうかの感触を得たかった

めに、報告者は2012年12月中旬に自腹で現地へ下見に出かけた。

下見からの帰国後、その人間関係を通じて、大学構内の見学許可および学生さんや先生方との交流許可を求めたが、人と人の関係で成り立っている中国の常として、比較的にスムーズに許諾が得られた。

なお、募集人数は梅州の奥地へ大型バスが入れないのと、日中関係の雲行きが怪しかったので、旅行団は20人にしぼることにした。日本からの添乗員と報告者を差し引くと18名が募集定員で、飛行機の採算から見て合計15人が最少催行人数という際どい募集となった。幸い募集締め切りの1月21日前には満席となり、企画を立てた側としては胸を撫で下ろした。

2月2日に日中学院で旅行の説明会を行い、下見の結果報告と旅程および見所の説明をした。

三 2月23日(土) 成田から広州へ

飛行機はよく遅れることで有名な中国南方航空としては、15時30分の定時からあまり遅れずにエプロンを離れたが、向かい風が強かった所為か、40分ほど遅れて広州の新白雲空港に到着し、20時20分ごろやっと飛行機から下りた。それでも順調に入国・荷物の受取りが終わり、現地時間の21時半には市内の遠洋賓館に投宿した。

空港では今回の全コースに同行する広東省中国青年旅行社の日本語女性ガイドの江さんが出迎えてくれた。巻舌音が多少広州訛りになる他は、普通話も聴き取り易かった。

広州は曇っていたが、北京・上海など日本で報道されているような都市と比べてPM2.5が含まれるスモッグはほとんどなく、出発前の杞憂は解消した。

四 2月24日(日) 開平と潮州行

二日目8時半にバスでホテルを後にし、高速道路を約120km、一路開平市の自力村へ向かった。

入場料は個人で160元であったが、65歳以上は半額、70歳以上は無料である。残念ながら団体だったので、全員有料入場となった。中国では多くの場所で老人が優遇されているので、個人旅行する人は面倒でもパスポートを提示して見学するとよい。

方家の銘石楼に登ったりして10時半から2時間ほどゆったりと散策した。薄雲を通して射す日光は強く、蒸し暑い感じがした。19世紀末から20世紀初頭にかけて海外で財をなして帰国した華僑が、西中折衷の防護機能を持つ建物として建てた「碉楼」は、三千棟以上もあったというが1,833棟が現存する。しかし、その大半はすでに住民が市街地に移動していて、空き家になっている。



開平自力村の銘石楼

時代は遡るが、碉楼は2010年3月に訪れた福建の客家土楼とは好一対をなしている。どちらも周囲からの襲撃を大きな城壁都市で守るのではなく、一家や一族の規模で守って

いるところに特徴が見られる。なお、開平は客家の地ではないので、建て方には共通性はないようである。

見学後、稠民農家荘という平屋のレストランで土地の料理の昼食を摂った。鶏や鶯鳥料理と魚が出た。メニューには犬料理もあったが供されなかった。主食の鰻飯の評判が良かった。

1時間の昼食後、13時半に赤坎鎮へ行き、川沿いに建てられた関族図書館と「騎楼」構造の建物からなる堤西路旧民居を散策した。関族図書館は旧民居の左半分を占めている関氏一族のための図書館で、現在でも資料の保存や学習場所の提供を行っている。

広州市内の夕方の渋滞を避けるために14時に開平を離れてバスで新白雲空港へ向かった。16時に空港に着いたが、搭乗券は成田を出発する際に翌日乗り換えということで、すでにトランジットとして発行されていたので、荷物を預けるだけですぐに安全検査に向かった。国内線の搭乗検査は非常に厳しくちょっと手間取ったが、飛行機は17時過ぎに飛び立ち、18時半ごろに掲陽・潮州・汕頭三市の空の出入り口である掲陽潮汕空港に到着した。

空港では潮州の男性ガイドの陳さんが出迎えてくれた。たいへんきれいな普通話をお話するので、江さんの通訳なしでも直接理解できた参加者もいるのではないかと思う。江さんはこの地の出身ではあるが、あまり日本語への通訳が順調ではなかった。以後梅州までは、日本からの添乗員の手塚さんの手を煩わして普通話からの通訳をしていただいた。

空港で荷物を受取って、19時半から東海酒店の南山湾潮菜館で約1時間潮州料理を堪能した。爽やか・パリパリ・あっさり・新鮮という、中国四大料理の広東料理の一つである潮州料理は日本人の口にとても良く合った。

食事後、再びバスに乗ってこの日の宿の潮州賓館へと潮州市内に向かった。なおこの中型バスは梅州から来たバスで、運転手の丘さんは梅州大埔(bù)県の客家人だそうである。五日目の広州行きまでの運転をお願いしているとのことであった。

この日はちょうど旧暦一月十五日の元宵節に当たり、潮州の街中に赤いランタンがぶら下がり、花火が打上げられていた。人で一杯だった市内の大きな公園の前の通りは、普段は渋滞しないそうであるが、夜遅い時間にもかかわらず車でごった返していた。

五 2月25日(月) 潮州と梅州

朝9時にホテルを出て9時20分に韓江に沿う明代の潮州古城の城壁の門の前でバスを

降りた。廣濟(jì)樓と書かれた門の前には中国四大古橋の一つ広濟橋がかかっている。10時からの昼間モードにならないと渡れないとのことなので、先に門をくぐって城壁に登ったり、「牌坊」が建ち並ぶ古い街を散策した。

唐の玄宗時代の736年に建立された開元寺は修理中で、しばらくはほんの一部しか参観できないとのことだったので、入



潮州韓江に架かる広濟橋

場はしなかった。10時過ぎに韓江に架かる長さ500m強の広濟橋を渡りはじめた。このあたりの韓江は兩岸の土手の間を目一杯に流れていて、河原というものがなかった。

広濟橋は南宋の孝宗時代の1171年に最初は86隻の船を並べて作った浮き橋である。その後兩岸より橋脚島を延ばし、24の橋脚島と中央部の18隻の船から出来ている。『三国志演義』に出てくる船上に安定した場所を作らせた「連環計」の故事を想起させた。

夜間は船の部分は橋から外され、船舶の往来ができる。その昔は梅県の松口から汕頭までの河上輸送路に使われていた。現在でも上流の石材を運ぶのに使われている。

橋を1時間ほどで往復し、11時40分ごろから臨江酒店で昼食を摂った。1時間ほどで昼食を終え、高速道路の入り口手前で潮州のガイドの陳さんはバスを降り、高速道路を梅州へ向かった。道路はコンクリート舗装のままの場所が多く、バスはかなり揺れた。

14時半過ぎに高速道路に「客天下」なる看板が見え、城西の出口で高速道路を出た。ここで梅州の女性ガイドの楊さんがバスに乗った。非常にきれいな普通話を話したが、声が小さかったので案内はもっぱら添乗員の手塚さんの通訳に頼った。

田舎道を西にちょっと走り、15時前に南口鎮の鹿湖山風景区の入り口近くにある「南華又廬」に着いた。所有者の一族であろう老人夫婦が門前で出迎えてくれた。50分ほどかけて内部をくまなく見学した。建物の内部に舞台まであって、かつての一族の繁栄ぶりを彷彿させた。

この「僑郷村」にはかなりの数の「客家圍龍屋」があるが、内部はこの南華又廬以外は公開されていないそうである。南華又廬は圍屋の構造が半円形の典型的な圍龍構造になっておらず、また正面の池も残っていない。



南口鎮の僑郷村にある南華又廬の演劇用舞台

15時45分にバスに戻り、市内に入って韓江の上流である梅江を渡って、二泊する予定の華美達酒店(RAMADA ホテル)に向かった。半時間ほどで到着し、17時過ぎまで荷物の整理をしながら休んだ。なお、梅江はこの街で釣鐘状に蛇行しており、旧市街から西・北・東に出るには必ず梅江を渡らなくてはならない。南側には鉄道の駅と飛行場がある。

ホテルから再度梅江を西に渡り、渡ってすぐの西中折衷式の万秋楼で夕食と見学を兼ねた。18時から客家料理の夕食に臨んだ。報告者は、春節の越年や客家の女性が子供を産んだ時に産後の滋養を摂るために飲むという、「娘酒」を注文してみんなで味わった。

娘酒は日本で言う本味醂であり、餅米を醸造した甘いお酒である。日本でも三州味醂など本醸造の味醂は老酒のような黄色い透き通った色をしているが、娘酒も同じである。福建の土楼で娘酒の甕が土中に寝かしてあるのを見学された方もいると思う。

万秋楼には客家の諺語や独特の漢字の額が掛っていた。食事と見学は1時間ほどで終了し、ホテルに戻った。自由行動時間には街に出た人も多いが、梅州の街は珠江デルタの諸都市のように各地からの「民工」が集まって来ていないので、比較的安全であった。

8時半にホテルを出発し、梅江沿いの街松口鎮へ向かった。村々を回る公共バスで行くと2時間かかると聞いていたので心配したが、8割程度の行程は梅州の市街からまっすぐ梅江沿いに葉剣英紀念園へ向かう片側2車線の「剣英緑道」を走ったので、40分ほどで紀念園に着いた。その後中型バス向きの道を少し進み松口鎮の旧市街へ向かう辺りで、バスはこれ以上進めなくなった。ちなみに梅州のガイドの楊さんはこの街の中学を出たそうである。梅州の旅行社は的確な人員を配置してくれたと感謝する次第である。

9時45分にバスを降りて、街を抜けて梅江に架かる古い橋の袂から階段を降り、川沿いの石畳の狭い通りの両側に建物が並ぶ街へ出た。朝から時々降っていた雨がちょっと強くなったが、傘をさして百年前の松口鎮にタイムスリップした。

梅州の客家の男達は、この古い街の至る所にある小さな船着き場から船に乗って梅江を下った。梅江は、やがて福建省から流れてくる汀江と合流して韓江となり、汕頭で海に入る。客家の出稼ぎ人達は汕頭の港から海外に華僑として働きに出て、ある者は成功して帰国し、多くの者は出先に骨を埋め、ある者は行方もわからなくなった。女性は家に残り、家を守り子育てをした。

この梅江にぴったりと寄り添った古い町並みは、船から自動車などへ輸送の中心が移り、人も道路交通の便がよい方へ移ったため、今はかなりの部分が廃屋と化してしまっている。

10時半ごろにふたたびバスに乗り、11時過ぎから往路途中に横目で見てきた葉剣英紀念園を見学した。葉剣英元帥は、文化大革命の時に跳梁跋扈した江青ら「四人組」を実質的に追放したことで有名である。晩年は全国人民代表大会常務委員会委員長を勤め、事実上の国家元首の役をしていた。紀念園の中に彼の故居があり、そこも公開されている。

葉剣英紀念園に隣接する徳和隆酒店で12時15分から1時間ほど客家料理の昼食を摂った。昼食後再び剣英緑道を走り、13時45分に客家博物館に着いた。

客家博物館は国家級博物館で嘉応学院の客家研究所と並んで、客家文化の研究の中心となっている。客家の移住や文化の状況はここを見ればよく理解できる。14時半に博物館を出て、15時に在学生数2万人の総合大学嘉応学院の西門に着いた。

大学の学生さんは16時に来る予定だったので、ちょっと街を散策したが、道が悪くて歩き難かったので、戻ってバスで休憩した。なお、この日は朝のホテル出発時から嘉応学院日本人教員の“ひとみ先生”が同行し、大学側との連絡を取ってくれた。



まだ住民が住む小香港と言われた松口古鎮

16時に学生さんが10人(ちょっと遅れてさらに2人)来たので、旅行団の3~4人に学生2人という組み合わせで大学構内および大学に隣接する「留餘堂」を1時間半ほど案内してもらった。留餘堂は前に池があり、池と半円形の建物の前との間に科挙合格者を顕彰する「楣杆」が並ぶ伝統的な囲龍屋の造りの張氏一族の建物である。

大学は、学生宿舎を含むほとんどの建物にそれを寄付した華僑の名前が付いており、通常の地方大学では考えられないような立派さであった。孫娘のような学生との交流は、旅行団の方たちにとってはとても新鮮な経験であったと思う。さらに学生さんたちにとっては、多くの日本の方々と交流する貴重な機会を与えられ、大変感謝しているとのことであった。

17時半過ぎに日本語科の中国人女性教員の張・侯・金のお三方が見え、バスに同乗して金徳宝国際酒店へ行き、18時半から夕食兼交流会を開いた。彼女達には三つのテーブルに分かれて日本語で自由に話をしてもらい、20時過ぎにお開きにした。その後記念写真を撮ってホテルに戻った。



梅県出身の香港の実業家曾憲梓氏が寄付

七 2月27日(水) 高速道路を広州へ

朝8時にホテルを出て、400km強の道のりを5時間かけて一路広州へ向かった。渋滞に巻き込まれることもほとんどなく、13時に遠洋海珍酒家に着いて昼食を摂った。14時に昼食を終わり、梅州から付合ってくれたバスは帰途につき、地元広州のバスに乗り換えた。

ここからの観光は、広州のガイドの江さんのほかに朱さんという7月に大学卒業予定の見習いガイドの女性も案内を手伝ってくれた。

午後はまず西漢南越王博物館へ行って、一度も盗掘の被害に遭っていない王墓から掘り出された文物の展示を見た。ただ、ここでは博物館専属のガイドが手慣れた日本語で20分ほどでどんどん案内してしまい、肝腎の玄室も見学しないままお土産売り場へ案内されてしまった。その後、自由時間を設けて、各自で玄室など見残した場所を見て回った。

次にすぐ近くにある中山紀念堂に行き、広い敷地の庭園を散策した。建物は孫文の死後すぐに建ったもので、会議・公演等のために使われている。内部見学はしないで16時に外に出、北隣の越秀公園に入って坂を登り、広州博物館になっている明代の建物鎮海楼で広州の歴史・文物の展示を見た。

その後、17時15分に旭璟酒家へ行き広州料理の夕食をした。食後19時半に2泊予定の珀麗酒店に投宿した。

八 2月28日(木) 広州市内観光

朝9時15分にホテルを出て、10時に市の東側にある「黄埔軍校」に着いた。孫文が総理、蒋介石が校長で、旧ソ連軍の援助の下で北伐軍の将兵を育てた学校である。なお現存する建物は1996年に再建されたものである。11時に見学を終え、バスは再び市内を西に抜け

て、英仏租界があった珠江沿いの人工島「沙面」に12時直前に到着した。

旧日本領事館などもあった欧風の町並みを40分ほど散策し、昼食は沙面からほど近い「飲茶」で有名な泮溪酒家で摂った。14時に再びバスに乗って広東省博物館へ行った。

この博物館は出来立てで、建物ばかりが立派で展示品も少ない上、順路の設定理由も分からないという、不出来なものであった。日本から最初に広州の旅行社に出した見学希望個所には入っていなかったはずであるので、日本からの添乗員の手塚さんに訊ねたが、知らない内にいつの間にか入っていたそうである。

博物館はまたまた市の東部にあったので、往復と見学時間を合せて2時間近くを無駄にしてしまった。旅行の企画者としては、まんまと中国側の博物館宣伝工作に乗せられてしまい、以後の見学個所で時間がゆっくり取れなかったことを反省している。

16時ようやく蘇東坡が名付けたという六榕寺に入って、小さいので見学時間を15分に制限して中を観た。昔からの榕樹(ガジュマル)はすでに無く、今あるのは樹齢150年ほどだそうである。続いて「未有羊城，先有光孝(光孝寺は広州城ができる前からある)」という言葉で有名な禅寺の光孝寺を20分ほどで観た。インドから中国に禅宗が伝来した初期に出来た寺で、元は南越国最後の王の趙建徳の邸宅だったという。

今回の旅の最後となる陳氏書院には門限ぎりぎりの16時40分に入った。これは広東省72県の陳氏の祖廟兼学堂として建てられたものである。文化大革命の時に紅衛兵による破壊を免れるために、印刷労働者達がここを毛主席語録の臨時印刷所にして、文化財を破損から守ったということである。17時半の閉館寸前までいて、今回の旅行の見学先はすべて無事こなすことができた。

17時45分から月餅で有名な蓮香楼で最後の宴を持ち、自己紹介や旅の感想などを述べて、翌日の朝が早いため19時にお開きとし、ホテルに帰った。

九 3月1日(金) 広州から成田へ

帰国の飛行機は9時半の出発だったので、朝食後7時にホテルを慌ただしく引き払いバスで空港に向かった。飛行機はほぼ満席だったが4時間半あまりで成田に戻った。風が強く着陸時に機体はかなりはげしく揺れたが無事着陸でき、14時45分に帰国した。

入国審査の前に解散式を行い、4月20日午後に写真交換会を行うむねを発表した。

今回の旅行では、日中の各旅行社および校友会事務局の方々のご尽力と参加者のご協力並びに嘉応学院日本語学科の先生および学生さんの参加も得て、楽しく無事に終えることができたことに感謝の意を表して、報告を終了する。

なお、ここに掲載しきれなかった写真については、校友会のHPを参照していただくと幸いである。



梅州の金徳宝国際酒店で嘉応学院の先生方と

報告：校友会旅行委員 猪飼